干拓から始まる
岡山平野南部地域の成り立ち

歴史文化

暮らし

環　境

「児島湾周辺農業水利事業　完工記念誌 より」

「岡山平野鳥瞰記 より」

「児島湾周辺農業水利事業　完工記念誌 より」

農林水産省 中国四国農政局
岡山南土地改良建設事業所

干拓の歴史

岡山平野の南部一帯は、秀吉の高松城水攻めがあった天正10年（1582年）当時、瀬戸内海に浮かぶ児島（現在の児島半島）と本土との間に20余りの島々を点在させた美しい海でした。この地域は「吉備の穴海」と呼ばれ、東に吉井川、西に高梁川、中央部に旭川と岡山県の三大河川が全てこの海に流入していました。従って三大河川の強力な沖積作用で島々の間には干潟が発達し、近世干拓史のスタートを可能にする条件に恵まれていました。

1585年の宇喜多開墾に次いで行われた西阿知新田・東阿知新田の開発により、高梁川（東高梁川）左岸堤防が児島の西北端に達し、この時点（1618年）をもって児島半島が誕生しました。「吉備の穴海」は半島に抱かれた静かな入海「児島湾」に変貌しましたが、二大河川（旭川・吉井川）の沖積作用により干拓の適地として新田開発が盛んでした。江戸時代の寛永年間より慶応に至る約240年間をみると、児島湾沿岸で約6,800haもの土地が干拓により造成されています。

明治時代になると廃藩置県に伴い、家禄を奉還した旧士族たちの授産事業としての干拓による農地造成が契機となり、大阪の豪商「藤田伝三郎」によりこの地域での大規模干拓が開始されました。

湾内約7,000haのうち、約5,500haを８工区に分けて順次着工し、昭和16年までに第１～第５工区約2,970haが造成されました。昭和14年に着工した第６区（約920ha）はその後の農地改革制度に伴う藤田農場解体により一時工事を中断していましたが、昭和23年農林省がこれを引き継ぎ、昭和29年に完成しました。また第７区（約1,650ha）は昭和19年農地開発営団によって着工しましたが、昭和22年営団閉鎖に伴い農林省に引き継がれ、昭和38年に完成して現在に至っています。

藤田伝三郎（1841-1912）

山口県萩市出身。高杉晋作の騎兵隊員でした。明治維新後、藤田組を組織し、数多くの事業を行いました。
岡山市南区藤田という地名は、児島湾干拓で偉業をなした藤田伝三郎の「藤田」が地名となったものです。
「児島湖 過去から未来へ 岡山海岸保全事業のあゆみ より」

干拓の歩み――年表

古代

吉備の穴海（あなうみ）の時代

現在の岡山・倉敷の市街地の大部分は海面下。20余の島が浮かぶ吉備の穴海と呼ばれていた。吉井・旭・高梁川の沖積作用で次第に遠浅の海になり、これが後の干拓のベースになる。

●奈良時代

8～9世紀　十二ケ郷用水湛井堰造られる。
吉備の穴海で小規模な干拓が始まる。
中国山地で、タタラ製鉄が盛んになり、岡山の三大河川で大量の土砂が流出。吉備の穴海の堆積が進む。

中世

●平安時代

1182年　妹尾兼康は湛井十二ケ郷用水大改築。

1184年　源平の藤戸合戦当時、児島は本土と離れた島だった。浅瀬の海峡は藤戸の渡しがあった。

●室町時代

1492年頃　八ケ郷用水疎通する。

近世

大規模干拓の開始

秀吉の高松城水攻めの堤防造りの技術をヒントに宇喜多秀家、干拓を始める。

●安土桃山時代

1582年　羽柴秀吉、備中高松城水攻め。12日間で約3キロの堤防を築く。

1585年　宇喜多秀家、酒津・倉敷間に宇喜多土手を築き干拓備前・備中の干潟地開発の始まり。

藩営大干拓の時代

●江戸時代

寛永年間から慶応に至る240年間に約7,000haもの大干拓が行われた。

1630年頃　児島は本土と陸続きとなる。
吉備の穴海は東の児島湾と西の阿知潟にわかれる。
寛永年間、戸川正安、福田古新田、大福新田開発。
加須山新田、船穂内新田、吉岡新田、旭川・笹ケ瀬川間の大半が開発される。

1688～1703年　元禄年間、備前藩営の大干拓が始まる。
倉田新田（1679年 329ha）幸島新田（1684年 591ha）
津田永忠、沖新田（1696年 1539ha）
備中藩でも、藩営干拓を中心に大規模干拓が進む。
浅口郡（2454ha）窪屋郡（1649ha）

1670年頃　津田永忠、百間川開削。
自動開閉式観音開き唐樋の水門や遊水池を設ける。

1679年　津田永忠、倉安川開削。舟運、干拓地用水路として活用。

1686年　津田永忠、坂根堰より取水する大用水建設。

1700年代初め　児島郡で民営大規模干拓が始まる。
茶屋町付近（400ha）
享保元年、福田古新田（100ha）、二人の人柱の犠牲あり。

備前沖新田開発後120年間、干拓事業は停滞する。

1754年　干拓と漁業をめぐって備前・備中両藩の国境論争起きる。

文政年間　十二ケ郷用水より興除新田の用水確保。
十二ケ郷用水東手用水路より分水し、汗入川を掘削、汗入（あせり）水道を設ける。汗入峠の岩質が固く岩石を焼いて割り取る。

1824年　興除新田840ha造成。

1845年　福田新田開発。

現代

民営大干拓の時代

明治維新後、民間の干拓気運は高まり、藤田伝三郎の「藤田干拓」は、現代の児島湾干拓の基礎となる。

●明治時代

1873年（明治6）　禄を失った士族144名が児島湾の開墾を出願するが成功せず。

1880年　生本伝九郎、児島湾全域干拓構想を高崎知事が内務卿に具申。

1881年　オランダ人土木技師ムルドルが児島湾実地調査。
全面干拓を否定。河口を広げて堰堤を造る方法を提言。

1882年　生本伝九郎、大阪の豪商藤田伝三郎に干拓事業への参加を要請。

1889年　藤田組の干拓起業（ムルドル技師指導による計画）認可される。

1899年（明治32）　児島湾干拓第一・二区の工事着手。

1900年　第一区潮止完了。
高崎知事にちなむ「高崎」の地名が残る。

1904年　第二区潮止完了。

1905年　第一区の干拓地完成。

（明治38）　1914年（大正3）耕地整理ができる。

1912年　第二区の干拓地完成。藤田村誕生。

（明治45）　藤田伝三郎死去。

●大正時代

1914年（大正3）　児島湾干拓第三・五・六区の工事着手。
第一区の耕地整理完了。

1917年　興除村にアメリカ製エンジン輸入される。

1920年　外国製耕転機輸入され藤田農場で使用。

1922年　興除村、福田村等で小作争議起こる。

1924年　未曾有の大干ばつで発動機、ポンプが普及、脱穀機、籾摺機等普及し農業の機械化が進む。

●昭和時代

1933年　児島湾干拓第三・五区の本工事着手。
児島湾沿岸各漁協は開墾許可取消しの行政起訴。

1935年　第三・五区の潮止完了。

1937年　第三・五区の西部地区の分譲開始。

1939年　第六区の本工事着手。
この年85日間干天の大干ばつで干拓地ではほとんど収穫皆無。

1940年　第三・五区東部地区の区分竣工。
引き続いて41、49、50にも竣工、東部は工業地帯に、西部は農業地帯になる。

1941年　第六区の潮止完了。

1944年　第七区の工事を藤田組より農地開発営団が引き継ぐ。

農林省干拓の時代

戦後、藤田組の干拓事業は農林省が引き継ぎ、大規模干拓が進む。

1945年　藤田組は商号を同和鉱業（株）に変更。

1946年　農地改革により第六区は国家買収、農林省が引き続き施工。

1947年　第七区工事を農地開発営団より農林省が引き継ぐ。

1948年　第七区の潮止完了。
農林省は藤田組より第六区の埋め立て免許を買収。

1951年　第七区への入植始まる。

1954年　第六区干拓事業竣工。

児島湖淡水化始まる

1956年　児島湖締切完了。
昭和天皇・皇后陛下が締切堤防をご視察。

1959年　締切堤防完工記念切手を発行。

1961年　締切堤防開通式。

1963年　第七区完工。

（昭和38）　児島湾干拓が完成、現在の地勢となる。

「児島湾締切堤防の概要 より」

コラム

干拓の方法

干拓は海の中に堤防をつくり、堤防で囲った中の水を海に出すことで陸地に変えていきます。

①海の中に堤防をつくります。

②海の満ち引きを利用したり、ポンプで排水し、陸地にします。

埋立との違い

埋立は、海の中に土砂を入れて新しく土地をつくる方法です。埋立は、海より土地が高くなるようにつくります。

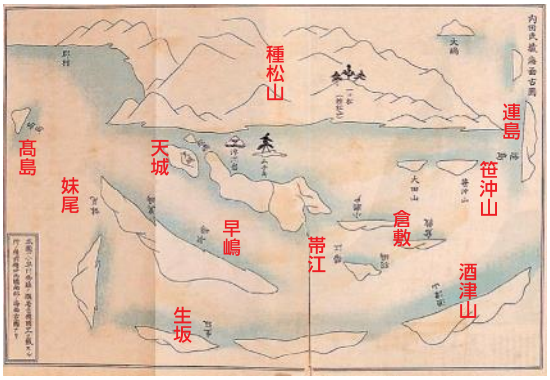
古代の児島湾

秀吉の備中高松城水攻めがあった天正10年（1582年）当時、瀬戸内海に浮かぶ児島（現在の児島半島）と本土との間には、20余りの島々が点在する美しい海で「吉備の穴海」と呼ばれる浅い海が広がっていました。

東の吉井川、西の高梁川、中央部に旭川と岡山県の三大河川が全てこの海に流入し、上流部の中国山地において、たたら製鉄のための砂鉄採取や、製鉄に不可欠な木炭を得るための伐採が長く続けられていたことから、土砂が大量に流れ込み、その強力な沖積作用で干潟が発達していました。

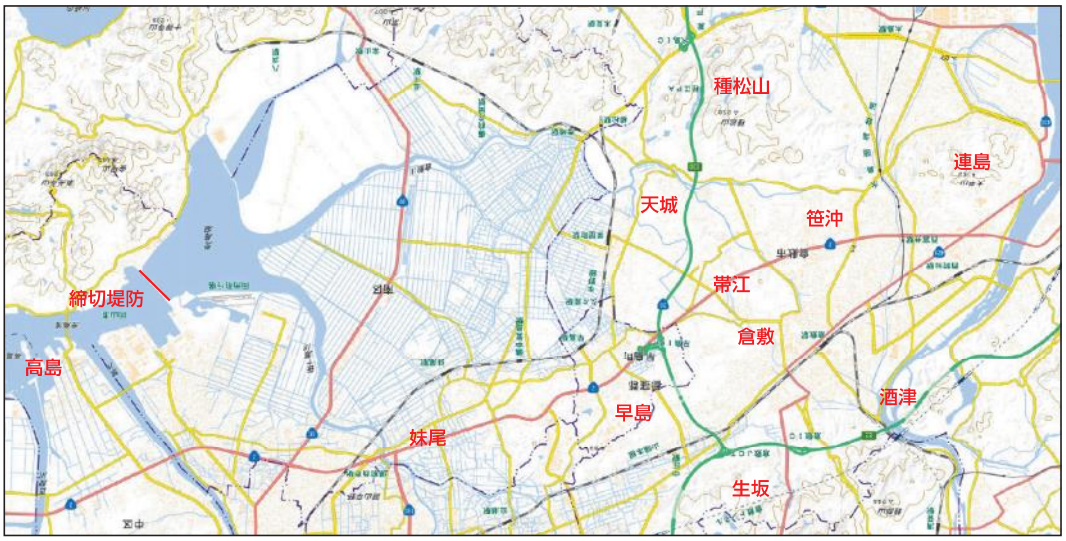
近世の干拓

干拓するには好条件であったこの地は、古代から細々と干拓が続けられていましたが、戦国時代の宇喜多家、江戸初期の備中松山藩の干拓により、高梁川左岸が児島と陸続きとなり、児島湾が誕生しました。



【戦国時代の海面古図】
かつては多くの島々が浮かぶ海でした。みなさんにもなじみのある地名を見ることができます
「岡山平野鳥瞰記 より」

【現在の地図】
海の大部分は陸地になり、現在の岡山平野になっています
※ 地理院地図を加工して作成



注）海面古図と比較しやすいよう、現在の地図を逆さまにしています。

明治時代から昭和にかけての干拓

「児島湾干拓と児島湾締切堤防」より抜粋

ムルデル（1848-1901）

オランダ生れの土木技師。明治12年に来日しました。明治23年(1890)に完成したわが国土木史上、屈指の大事業となった利根運河を手がけました。

明治時代に入ると、これまでお殿様に仕えていた武士の人たちが仕事を失なったため、こうした人たちが農業で生活できるように児島湾の干拓が行われました。

政府はオランダ人のムルデルに児島湾を干拓できるかどうか調査を依頼し、ムルデルは児島湾を８つの区に分けた干拓の計画をとりまとめました。

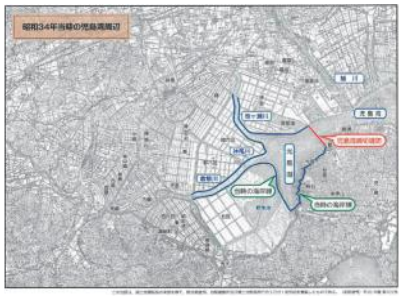
しかし、実際に工事するには、多くのお金が必要となり、なかなか工事が開始されませんでした。

そうした中、大阪の大富豪「藤田伝三郎」に工事をお願いし、伝三郎は自分のお金を出して工事を開始しました。

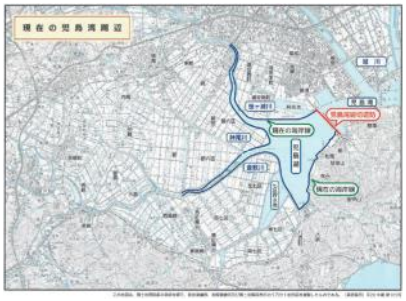
当時は、コンクリートも無い時代で、大きな石や木の枝などを使って堤防の土台をつくり、その上に土や石を積み上げ堤防を築いていきました。しかし、児島湾は底なしのような海で、堤防ができあがるとその重みで海の中に沈んでしまう大変難しい工事でした。

明治30年代ごろの児島湾周辺図

大正14年ごろの児島湾周辺図



昭和34年当時の児島湾周辺図



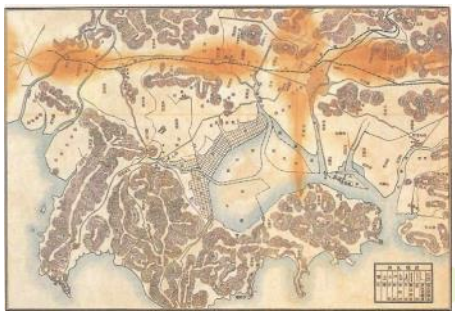
現在の児島湾周辺図

「児島湾干拓と児島湾締切堤防～昔と今～より」

その後、昭和23年に国（農林省）が工事を引きつぎ、昭和38年にすべての干拓事業が完成し、約5,500haの農地ができあがりました。

工事が完成したばかりの干拓地は、土の中に塩が混ざっていて、お米を作るのに大変苦労をしました。塩分を抜くために田んぼの中に溝を掘ったり、用水路をつくったりして、農業ができる環境を整えていきました。

また、飲み水や生活に使う水は、井戸を掘っても塩水がでるため、溜めた雨水をろ過して使ったり、干拓地の外の村まで水をもらいに行っていました。今、児島湖の周りに広がる田んぼや畑は、昔の人たちの苦労や努力によってできた土地なのです。



ムルデルが策定した児島湾干拓計画図
（農林水産省HP：近代の児島湾干拓計画を策定したムルデル より）